

## 新入生諸君へのお祝いのことば

著 著 著 著

教育学部福山分校主事 藤 谷 健

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。もう何回、何十回と祝福を受けられたと思いますが、私からもあらためておめでとうと申し上げる次第です。入学試験にみごと合格し、高校生から大学生へと人生の階段を一歩上ったのですから、おめでたいことは確かなのですが、世の中には、おめでたいことと楽しいことを混同している人が多いので、皆さんの中にも、もしかしたらそのような人がいるのではないかと、心配もしているのです。というのは、大学というところは深く専門の学芸を教授研究するところだからです。高校までの学習活動は知識の習得が主であったのに対して、大学における学習は学問の方法を身につけることであり、そのための基礎知識と、それを支える広い教養の習得です。つまり皆さんは、今まで全く経験しなかった新しい学習の場へ放り込まれた訳で、そのことは皆さんに対して重圧となるはずです。そのむかし徳川家康公は申されました。人の一生は重荷を負うて遠き道を行くが如し。急ぐべからず。と。どうせ一生重荷の下に居るのなら、その重圧を何とか楽しさに転化しなければ、長い一生を生きがいをもって送ることはできないでしょう。あなたは今、そのひとつの節目に居るのです。私はさきに、おめでたいことと楽しいことを混同している人が多いと言いました。しかし、おめでたいことに伴う苦しみは、楽しさに転化できる苦しみなのです。楽しさに転化できる苦しみだからこそおめでたいのです。例えば、広島大学には千六百人近い教官が居ますが、彼らはすべて研究者ですから、連日研究の苦しみにさいなまれているはずです。研究というのはとくに独創性を要求される仕事ですから、時にはやり切れない気持ちになることもあります。もし、研究が単なる苦しみだけだったら、大学教官になろうとする人は居ないはずですし、彼らは毎日生きがいの

ない生活を強いられているはずです。しかし現実はその逆です。このように考えてくると、私が大学での学習の苦しみは楽しさに転化できる苦しみであると言っていることが、いわゆる倒錯的な意味での転化ではないことがお分かりいただけたと思います。そこで私は、このたびわが広島大学の一員となられた諸君に、受験勉強というような、単に合格しさえすれば良いという、人生の中では比較的底の浅い苦しみではなく、長い人生を見通して、自らの生きがいを求めてゆくという苦しさを味わう出発点として、この日を位置づけてほしいと願うのです。

ところで教育学部は、今年の夏に西条の新キャンパスへ移転統合します。新しい校舎は既に建設が終わって我々を待っています。したがって、福山分校という組織は今年度中になくなり、皆さんが学部へ進学するときには、西条地区の統合された教育学部へ進学することになります。福山分校がここに至るまでの40年間には、諸君の先輩や当時の教職員の血のにじむような苦闘の歴史があったのですが、今それを語ることは致しませまい。とにかく今日、音楽・体育・家政各教育学は、全国でも数少ない博士課程後期までを完備した講座に成長し、そこでは優れた学究の徒が来るのを待っております。われわれは制度の整備に安んじることなく、実体の充実したものにしなければならず、そのためには優秀な若い人材が必要であります。皆さんはこのような状況の中に入学してきたのでありますから、これに応えて、入試合格に安んじることなく、一層の奮起を希望するものであります。

もう一度申し上げます。皆さんは広島大学へ入学したこの日を、これから先の長い人生の苦しみの出発点として位置づけて下さい。これをもって皆さんへのお祝いの詞と致します。